東北アジア学術交流懇話会ニューズレター



第38号

目次

論点:洞爺湖サミットを終えて	1
第 4 回東アジア出版文化に関する国際学術会議	2
佐藤源之・飯坂譲二教授 講義「ポーラリメトリック SAR 講習会がめざすもの」	3
講演会/研究セミナー紹介	~6
シベリアたより	6
客員教授紹介	7
- 会員の広場:ロシアに単身滞在してわかったこと	
編集後記	



洞爺湖サミットを終えて



東北大学東北アジア研究センター教授

明日香壽川

北海道洞爺湖サミットが終わり、日本のマスコミでの温暖化問題の取り上げ方も一息ついた感がある。しかし、京都議定書の第二約束期間である2013年以降の温暖化対策国際枠組みをめぐる国際交渉は、まさにこれから正念場を迎える。

今回の北海道洞爺湖サミットの評価は、事前の期待値が大きいか小さいかによって変わる。期待値が小さかった人は、米国を含めたG8が温室効果ガス排出量の2050年半減という長期目標に合意したように解釈できる文章を残せたことで、前回のサミットの宿題を果たしたのではと考える。一方、期待値が高かった人は、2020年の中期目標における具体的な数字に言及できなかったことをもって失敗と評価する。

筆者は、どちらかと言えば、期待値がそれほど高くなかったので、サミット自体は失敗だったとは思わない。 中期目標に関しては、議長国である日本政府自体が具体 的な数字を国内において全く議論していないのに等しい ので合意などできるはずもなかった。

また、表には出なかったものの、日本国内においても、 温暖化対策に対する「抵抗勢力」が存在する。彼らの強 い圧力をはねのけて、洞爺湖の北海道洞爺湖サミットで、 国連プロセス、国別総量目標、IPCC(気候変動に関する政府間パネル)の3つの重要性を再確認し、2013年以降の国際枠組み作りのための外堀を埋めたという点では、交渉に前向きに関わった人たちの努力は正当に評価するべきだと思う。

ただし、これからが環境立国をめざす日本の真価が問われる時である。日本政府に対しては、中期目標の早期策定や排出量取引制度の本格導入など、自らの温暖化政策の規範や内容の早急な具体化が望まれる。さらに、中国やインドなどの途上国を関与させながら温暖化問題と深くかかわるエネルギー資源や水、食料などの問題も含めた議論を積極的にリードし、世界全体が温暖化問題を

克服しながら貧 困を抜け出とろうな が。きなそがらする 大きなそが今、 大きなどう、 でからながらない。 大きなどのかられている と思う。



サミットが開催された洞爺湖の風景

第4回 東アジア出版文化に関する国際学術会議の紹介

磯部 彰

今回の国際研究集会は、第1回〜第3回東アジア出版文化に関する国際学術会議の内容を発展させたもので、日本学術振興会アジア・アフリカ学術基盤形成事業の若手研究者育成を視点に入れて、2日間に亘って実施しました。今回開催した国際研究集会とアジア・アフリカ学術基盤形成事業は、いずれも日本学術振興会の受託事業でした。

第1日目は「近世東アジアの出版文化と中国小説」というテーマで、中国近世江南及び福建方面の出版と流通、編集者と明代建陽の出版システム、中国中世文学が印刷術の進展によって変貌した流れ、及び朝鮮朝での三国志演義や中国小説の複刻事業についてをそれぞれ講演で紹介し、各セクションごとに各国の専門家が評論を加える形式で進めました。パネルディスカッションでは、三国志演義など中国四大奇書を中心とする小説が元明時代いかに発展し、相互関係を持ったかについて、元明の書林の営業、四大奇書及び短篇小説相互の文学的関係に焦点をあてて討論をし、研究成果の情報交換などを実施しました。

平成20年7月28日(月)/第1日目

<仙台国際センター 日中同時通訳付>

国際研究集会 テーマ「近世東アジアの出版文化と中国小説」

- 開会のあいさつ 実行委員長 磯部彰
- ●研究報告(1) 「明末の建陽書坊編輯者の福建ぐらし」 講師:北京大学 潘建国 (座長:王三慶 評論者: 竺青)
- 研究報告(Ⅱ) 「文字媒体の変化と学術文化の変容」
 - 講師:中国社会科学院 劉耀進 (座長: 鄔国平 評論者: 查屏球)
- パネルディスカッション

「中国四大奇書の成立と出版―嘉靖・萬暦の出版活動」 (座長: 磯部彰 パネリスト: 石昌渝、談蓓芳、中川論、鈴木陽一)

● 研究報告(Ⅲ) 「朝鮮朝における近世中国古典小説の出版」 講師: 鮮文大学校 朴在淵 (座長: 陳正宏 評論者:金鎬)

第2日目は、日本学術振興会アジア・アフリカ学術基盤 形成事業のセミナー「日本の出版文化研究」を、会場を変 えて東北大附属図書館会議室で実行しました。

セミナー(A)は、「日本近世の出版文化と社会」という演題で、中央大学の鈴木俊幸先生が、江戸時代の出版が書物系と草紙系に分かれつつも、後半になって相互の流通網拡大から識字率の上昇につながり、同時に文化情報ネットワークも構成され、近代日本社会の基盤が作られたとことをパワーポイント画像を用いて紹介しました。そこでは、仙台や信州などの地方の書肆・版元を含む日本の版元が果たした役割、とりわけ地域文化形成での書肆、つまり今日の印刷会社兼出版社の果たした貢献が示され、聴き手の関心を呼び起こしました。次いで、セミナー(B)では、今はやりのNHKことばをパクリ、「外国人研究者の見たクールジャパン」と題し、ニュージーランド・中国・ロシア・韓国の日本学研究者によるパネルディスカッションを行ない

ました。内容は、学部学生にも興味が持てる話題を中心とし、外国での日本研究の紹介から各研究者が日本研究から何を学び、自国の文化との差違をいかに理解したかについて意見を交換しました。セミナー(C)は、東北大学の貴重書(古写本、宋元明の木版本、朝鮮古活字本仕女図巻などの原本)を実見して、専門家の説明によってその特徴を理解する内容でした。会議終了後、国内の研究者や外国人研究者の方々と季節のものをいただきながら、研究者交流会を行ない、折しも涼しい仙台の夏のひとときを過ごしました。

平成20年7月29日(火)/第2日目

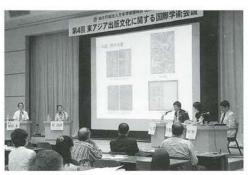
分科会 〈東北大学附属図書館2号館〉

アジア・アフリカ学術基盤形成事業セミナー テーマ「日本の出版文化研究」

- セミナー全体の紹介 磯部彰
- セミナー(A) 「日本近世の出版文化と社会」(中国語通訳付) 講師:中央大学 鈴木俊幸 (座長:高橋智 通訳:陳仲奇 評論者:若尾政希)
 - セミナー(B) パネルディスカッション「外国人研究者が見たクールジャ パン(日本文化)一出版文化の視点から」(日本語) (座長: 磯部祐子 パネリスト: スーザン・ブーテレイ(NZ)、 龔穎(中)、 崔官(韓)、エレーナ・ボイティシェク(ロ))
- セミナー(C) 東アジア古典籍研修(中日韓古典籍の世界―天平経から明清小説まで―)解説者:鍋島稲子、高橋章則、曽根原理



国際研究集会講演



国際研究集会パネルディスカッション風景

ポーラリメトリック SAR 講習会がめざすもの

東北大学 東北アジア研究センター リモートセンシング研究ユニット 佐藤 源之、飯坂 譲二

レーダポーラリメトリ (Radar Polarimetry) は電波の 偏波の性質を積極的に利用するレーダ技術です。単一偏 波を利用した従来のレーダに比べ、ポーラリメトリック レーダは装置が複雑になる反面、情報量は飛躍的に増え ます。2006年我が国が打ち上げた陸域観測技術衛星 ALOS に搭載されている合成開口レーダ PALSAR は民生 用として世界で初めてフル・ポーラリメトリックレーダ 機能を有し、常時観測を行うリモートセンシングセンサ です。ALOSに続きフル・ポーラリメトリックSARとし てTerraSAR (ドイツ)、RADARSAT-2 (カナダ) が運用 を始めるなど、レーダポーラリメトリは世界的にも新し いリモートセンシング技術として注目を集めています。 更に一部衛星の商用化もあって、データ入手が究めて容 易になってきました。一方レーダポーラリメトリは航空 機搭載SAR、気象レーダ、海洋レーダ、地中レーダなど 各種レーダセンサでも応用が進められています。

佐藤源之ならびに本センター客員教授飯坂譲二らは IEEE GRSSなどの学会、研究活動を通じて国内外多くの レーダポーラリメトリに関する研究者との交流を培って きました。ESA(European Space Agency)では、レーダポ ーラリメトリ技術の広い普及のため、パブリックドメイ ンでの研究、啓蒙活動を積極的に行ってきました。その 成果の一つがレーダポーラリメトリ解析用のフリーウエ 7 POLSARPro http://earth.esa.int/polsarpro/default.html です。本ソフトは豊富なチュートリアル教材を含んでお り、独習用に最適であるが、はじめてレーダポーラリメ トリのデータに触れようとする方には、やや専門的であ り敷居が高いように思われました。そこで、教材の一部 を日本語化すること、ならびにレーダポーラリメトリの 理解に必要な最小限の基礎知識の講義とソフトウエアを 実際に利用した演習を組み合わせた初心者向けの講習会 を企画しました。

本講座では、電波の基礎と物体からの反射、散乱現象 を説明した後、電波の偏波の定義、またそれに伴う電波 の諸現象を説明しました。その上で、ポーラリメトリッ クレーダによる計測原理を解説しました。

次に、衛星・航空機SARなどで取得され、我々が手に入れることのできるデータの構造と性質を説明した後、ポーラリメトリック解析のために現在使われている手法を数学的な基礎から説明しました。レーダポーラリメトリでは電磁波の物体からの散乱メカニズムを理解するために、データに共分散行列や固有値解析などを適用し、物理的な意味を明らかにする手法が利用されています。こうした数学的処理が実際に有効なことを説明しました。衛星SARを利用したインターフェロメトリ技術による

精密な地盤変位計測は地震・火山など防災分野で既に広く実用化されています。レーダポーラリメトリは優れた特徴を有するにもかかわらず、インターフェロメトリに比較して専門家以外理解が難しいなどの理由で、一般に広く知られた技術に成熟していません。本講座はレーダポーラリメトリをできるだけ多くの方に利用していただくことを目的として開講しました。一人でも多くの方がポーラリメトリデータに直に触れ、これを利用して、多くのデータからその有用性を提示していくことを期待しました。今回、東京会場には75名、仙台会場には35名の参加者がありました。

現在、我が国では次期SAR衛星の計画段階を迎えています。これまで蓄積されたレーダポーラリメトリの技術が、今後、より普遍的かつ実用的に利用されていくことを切に願っています。またALOS/PALSARで世界的に広まってきた我が国のリモートセンシングによる環境計測技術の優秀性を更に世界にアピールしていく上で、絶好のタイミングでると考えています。

本講座に関するお問い合わせは佐藤源之(sato@cneas.tohoku.ac.jp) あてにお願いいたします。また講義の詳細は以下でもご覧いただけます。: http://cobalt.cneas.tohoku.ac.jp/users/sato/index-j.html

●日時: 2008年9月24日-26日

●会場:東北大学 東京分室

●主催:東北大学東北アジア研究センター

●協賛:IEEE GRSS Japan Chapter、日本写真測量学会、 日本リモートセンシング学会

●参加:75名

●日時: 2008年10月10日、14、15日

●会場:東北大学 環境科学研究科

●主催:東北大学東北アジア研究センター

●協賛: IEEE GRSS Japan Chapter、日本写真測量学会、 日本リモートセンシング学会

●参加: 35名

-3-



講演会「淡水魚の生態」

4月11日(金)に東北アジア研究センター大会 議室において、講演会「淡水魚の生態」が開催さ れた。演者のひとりエレナ・ヤドレンキナ博士は、 ロシア科学アカデミー・シベリア支部・動物分類 学生態学研究所に勤務しており、今年1月より東 北アジア研究センターの客員教授として4ヶ月間 仙台に滞在中である。また、もう一人の演者の斉 藤憲治博士は、東北区水産研究所において魚類の DNAをもとにした遺伝的研究を行っている。本公 演会では、ヤドレンキナ博士は、西シベリア低地 における淡水魚の生物多様性の歴史的な背景と、 現在の魚類相を決めている要因や、気候の変化が 淡水魚群集に与える効果や発電所・ダム等の人為 的な影響について紹介した。斉藤博士は、水田や その周辺の農業用水路に生息している多くの淡水 魚が、このような一時的な水域を産卵や初期の生 息場所として利用している重要性について報告し

た。それぞれの講演は、下記の演題で、英語で行われた。

Kenji Saitoh (Tohoku National Fisheries Research Institute)

Ecology of freshwater fish in temporary waters (一時的水域における淡水魚の生活)

Elena Yadrenkina (Institute of Systematics and Ecology of Animals, RAS SB)

The present problems of fish biodiversity in Western Siberia- Climatic changes, anthropogenic loads, influence of introduced species upon native fauna - (西シベリアにおける魚類の生物多様性の今日的な諸問題 ー自然の動物相に対する気候変化、人為的負荷、導入種の影響ー)

(鹿野 秀一)



講演するヤドレンキナ客員教授

東北アジア研究センター共同研究会ソ連における検閲の実態について

寺山 恭輔

山田勝芳東北大学名誉教授が主催する科研費に基づく共同研究「東北アジアにおけるユートピア思想の展開と地域の在り方」の第五回研究会が2008年6月27日に東北アジア研究センターで開催され、寺山が「ソ連におけるメディアと検閲~ボリシェヴィキの描くユートピア~」と題して報告した。以下、報告の内容を簡単にまとめることにしたい。

ロシアを素材にユートピア思想を考えるという 課題を与えられたとき、ロシアにおける伝統的な ユートピア思想の系譜や、革命時に唱えられたユ ートピア思想とはかけ離れたアンチ・ユートピア 的なスターリン時代のソ連の現実、という側面か らユートピアに焦点をしばることも考えたが、 「崩壊するまで資本主義諸国に劣らない社会主義 社会=ユートピアを構築したと世界に向かって強 弁していた背後で、その現実を隠蔽するシステム として社会のあらゆる場面で機能していた検閲」 に光りをあてることで、ソ連共産党当局が想定し ていたユートピアを浮き彫りにできるのでは、と 考えた。

ゴルバチョフがソ連共産党書記長となり、1987年ごろより本格化したペレストロイカ政策の柱たるグラースノスチ政策は言論の自由、情報公開を意味するが、ソ連時代には共産党が情報を独占し、あらゆるメディアの流す情報を検閲制度によりコントロールしていたことは周知の事実である。ペレストロイカによる再生はならずソ連は最終的に解体されたが、解体後の1990年代以降、ソ連時代の情報統制、検閲に関するかなりの数の史料集、研究書が出版された。本報告は、これらの最新の成果をまとめ、ソ連という国家体制が作動していたシステムの一端を明らかにすることを目的としている。

検閲制度は帝政時代のロシアにも存在したが、 1917年革命後のロシアでは通称グラヴリトとい う機関が中心的な役割を担った。メディアへの掲 載や表現が禁止されている事項を列挙したリスト に基づき、検閲官が事前に内容をチェックして不 適切な箇所の削除を筆者、編集者に求めるという のが通常のやり方であったが、出版後に不適切な 箇所が見つかると事後的に出版物の没収、廃棄が 行われることもあった。グラヴリト以上に権力を 持っていたのが KGB などの秘密警察だが、最大 の検閲官はスターリンなどソ連共産党書記長であ ったことはいうまでもない。国民が情報を獲得す る場所としての図書館や古書店に対する厳しいコ ントロールも行われ、「禁止書物」は一般の読者 の目に触れないよう書庫の奥に隠された。また外 国の出版物のソ連への流入を水際で阻止すべく、 外国郵便を取り扱う郵便局にも検閲官が配置され た。検閲の対象は通常の活字媒体のほか、絵画、 ポスター、地図、肖像画、さらには音楽、ダンス、 演劇などにも及んだ。映画、ラジオに関する史料 集も刊行されており、それらについてもまとめる 必要がある。プーチン政権後に強化されたメディ ア支配、特に圧倒的な影響力を有するテレビに対 するコントロールのテクニックをソ連時代にいか に発展させていったのか興味深いが、管見の限り ソ連時代のテレビへの情報統制についての文献は 見当たらない。これは将来的な課題としてとって おきたい。プーチン以降、言論の自由が脅威にさ らされているとするなら、ロシアの現状を把握す るためにもソ連時代の検閲の実態を研究すること は、重要となるだろう。

2008年度は科研の最終年度にあたり、本年度 末の報告書作成のため、現在、鋭意その執筆に取 り組んでいるところである。

研究セミナー紹介

東北アジア研究セミナー「ロシア更紗とアジア市場」(5月19日)

塩谷 昌史

19世紀前半にロシアは繊維産業の分野、とりわけ、綿工業で初期工業化を達成する。ロシアで綿花栽培は不可能だったので、米国綿花と中央アジア綿花を輸入し、それを綿糸に加工し織布を行なった。製品化された綿織物の中で、最も代表的な製品が更紗であった。更紗はロシ

ア国内市場で販売されるだけでなく、ペルシア、中央アジア、清の各市場に輸出された。セミナーでは、更紗の写真をスライドで映し、また、輸出先のアジア市場の風景を見せ理解を促した。

東北アジア研究セミナー「宇宙からの環境、災害監視」(7月14日)

渡邊 学

2006年、宇宙航空研究開発機構から打上げられた衛星 「だいち」に搭載された、合成開口レーダは、災害監視や 環境監視などの分野での活躍が期待されている。この衛 星のデータが、実際にどのように役立っているかの紹介 を行った。また、この衛星観測と同期して、モンゴル、 日本、アラスカで行った現地実験の概要の紹介をした後、 本研究の結果、さらにどのような情報が衛星データから 得られるかについて紹介した。

シベリア便り

このところ食に関する安全性が問題にされることが多くなっています。ノボシビルスクも例外ではありません。

スーパーには所狭しと商品が山積みされ、買い物客が次々とショッピングカートに商品を放り込む光景はすっかり定着しました。お昼や夕方ともなれば会計を待つお客で長蛇の出来る店内には、餌をねだる小鳥のようにバーコードリーダー達のピーピー鳴く声が響き渡ります。がらんとした店で店員さんが退屈そうに座ったまま、お客の一挙一動を監察していたのは過去の話。都会に住む小さな子供にその頃の様子を話しても、きっと信じてもらえないでしょう。

品数が増えた現在、沢山の商品から何を選ぶかは個人の責任です。昔、食品は量り売りが基本だった頃は買う前に「これは新鮮ですか?」と売り子に尋ねるのが普通でした。否定的な答えが返ってくることは先ずないのですが、まるで合い言葉か、買い物の儀式であるかのように確認したものでした。今でも商品を手にとって製造年月日や添加物の有無をきちんとチェックする人もいますが、当時に比べれば少数派です。

有害成分として国内での使用が禁止されている添加物が 入った輸入食品や雑貨が流通しているというニュースや、 毒性の強い農薬を使用した農家(殆ど中国人ですが)が摘 発されたという報道はロシアでもあります。死亡者が出たというのはあまり聞いたことがなく、どちらかというと注意を喚起する内容なのですが、反響は大きく報道後に視聴者・読者からの質問が多く寄せられることもあるようです。学者の町だけに、化学物質に関する知識も豊富で"食"に対しての危機感が高いのかもしれませんが、食品選びという健康維持の基本を重視することは大切です。この先も、見た目や価格に騙されない買い物は必要ですが、安全性の高い食品でも身体に害を及ぼすことがあります。そろそろ平均寿命を延ばすべく、メタボに関する危機意識をもっと高めた方が良いのではないかと思うのです。

(徳田 由佳子)



商品のキャンペーンもよく見かけるようになった

● 客員教授紹介 ●

飯坂 譲二 教授

飯坂先生は1970年代に初期の段階でリモートセンシングを我が国に導入するきっかけをつくる仕事をされ、その後も引き続き環境計測に関する研究に従事されてきました。

1980年代後半から活動をカナダ天然資源省カナダリモート・センシング・センターなどに移され、現在ビクトリア大学地理学科で研究に携わっておられます。この間もリモートセンシングに関する日本語の専門書の編纂や数多くの講演活動を通じ我が国へのリモートセンシング技術の普及に努めてこられました。

飯坂先生は2007年7月に東北大学における特別講義のため仙台を訪問され、大学院学生を対象とする講演会、研究討論会を開催しましたが、これをきっかけに本センターへ客員教授としておいでいただくことができました。東北アジア研究センターではマイクロ波リモートセンシングである合成開口レーダ(SAR)の研究を精力的に進めておられます。

2008年7月本センターに赴任されてから、直ちに国内 でのSAR技術に関する講演、講習会活動を開始されま した。我が国のリモートセンシングが進むべき方向を 熱っぽく語る先生の姿を一度拝見すると誰もが、勇気 を与えられる気がいたします。

こうした活動の一環として 2008年9月に、東北大学東京分 室において、本センター主催 によるポーラリメトリック SAR に関する一般技術者向け講演 会を飯坂教授が企画され、佐 藤源之教授と共に講義を行い ました。本講習会は、森林、



農業、水産業など広い分野のリモートセンシング技術者の広い関心を集め、70名を超す受講者がありました。受講希望者が締め切り後も続いたため、10月東北大学において更に35名の受講者を集めて2回目の講習会を開催いたしました。東北アジア研究センター滞在中は引き続き我が国の地球環境観測衛星ALOS「だいち」に搭載されている合成開口レーダPALSARを利用した、森林環境計測に関する研究を継続しており、森林バイオマス評価、土壌水分計測、また岩手・宮城内陸地震被害地評価などへの応用をセンター研究者と共同で実施されました。

(佐藤 源之)

ブリンバト (布仁巴図) 教授

2008年9月1日より、2009年1月15日まで、中国内蒙古大学のブリンバト(布仁巴図)教授が客員教授として着任されました。

先生は、内蒙古大学蒙古学学院の教授で、ご専門はモンゴル言語文化の多方面に及ぶが、『元朝秘史』のモンゴル語の解釈や、アルジャイ石窟のモンゴル文字銘文の研究がよく知られている。『元朝秘史』は、チンギス・ハーンの一代記を中心にモンゴル族の歴史を綴った歴史書であるが、13世紀にモンゴル文字で書かれた原文は失われ、14世紀後半に漢字でモンゴル語の発音を写した「漢字音訳本」だけが現代に伝わっています。ブリンバト先生は、漢字音訳のモンゴル語を鋭い洞察力をもって読み込み、モンゴル文字独自の字形や正書法の特徴にもとづいて、モンゴル文字の原文の誤記・誤写が反映されている箇所が少なからず存在することを明らかにした研究によって、学界で高い評価を得ています。

本センターに客員教授として赴任中は、栗林が代表をつとめる「東北アジア民族文字・言語情報処理研究ユニット」に参加して、「『元朝秘史』におけるモンゴル語語彙の研究」のテーマで研究を行っています。なお、先生の所属する内蒙古大学蒙古学学院と東



北アジア研究センターとの間には本年10月に協力協定 が締結されたことにより、これが協定締結後最初の研 究協力となっています。

先生は1985年から國學院大學の留学生として東京に2年間滞在された。当時、短期で日本を訪問された奥様とともに仙台を訪れた由。今回はその奥様とともに、22年ぶりの来仙となりました。

(栗林 均)

会員の広場

お互いの交流拡大を目的に、会員皆様の近況・ご意見などを発信していただくスペースです(不定期)。 今回は、ロシアで3番目に人口が多くしかもモスクワ地区と2分する科学技術分野の研究機関を擁しながらシベリアの中ほどに位置するため、一般の日本人が殆んど住んでいないノボシビルスク市に単身6年半ほど在住ののち、今年春に帰国してロシア関連の会社を設立された新田祐子氏にお願いしました。

ロシアに単身滞在してわかったこと - 常識、価値観の違いを超えて-



株式会社ユニサービス 代表取締役

新田 祐子

私は2001年9月から今年4月まで、ノボシビルスクに単身滞在し、ロシアの高度成長期を見る、という得がたい体験をしました。組織も財産も身寄りもない私は、疎外されたり歓迎されたり、様々な生のロシア人に揉まれました。その結果、最近ロシア人の行動原理がだんだんわかるようになりました。

例えば、自己保身のためにウソをつくという行為があります。それ自体はどこの国にも、日本にもあるのですが、正直を貫いて立場を失った人に対する評価が、ロシアと日本ではだいぶ異なるように思います。ロシアでは、そういう人は「あいつはバカだ、皆のように嘘さえついていれば・・」と非難されかねません。

あるとき、私自身不可避な状況からミスを犯したとき、正直に申告したために職場を首になり、滞在許可を取り消されました。日本では、自分の過ちを認めれば、一時的に立場を失っても正直を貫いた、という点だけは好意的に評価されます。改心して生き直した人は、人格的にも成長します。

しかし、ロシアでは「非を認めた人を許せば、社会の非行を増長させる」という考えから、自首した人には厳罰が科せられることになります。ロシアのように、価値観の違う者同士の戦いの長い歴史を持つ国では、白黒の判断自体が多様です。そんな中で最優先されるのは、手段を選ばず自分と家族

を守ること。

かっこつけて男が死んで、残された家族が社会に守られるか、というとそうではない。大抵は放置されて、母はアル中、子供は施設で不幸の連鎖にまきこまれる。だから、男は嘘をついてでも、自己保身を図り、家族を守らなければならない、と考えるのです。

ロシア人と日本人は違います。その相違は、両国の歴史や 社会のしくみの違いから生じたものです。日本人から見て、 ロシア人が非常識に映ることがあったとしても、価値観や常 識の違いには、それなりの理由があるのです。

それでも、「許す寛容」「改心」という日本的な価値観を私は美しいと思います。何とかこれを、ロシアや、世界の人々に、そしてそれを忘れかけている日本人自身にも、理解してもらえないものかと念じております。



ノボシビルスク市の文化行政のリーダー が秋田県で交流イベント(2006.8)



ビジネスマン向け日本語教室。ひなまつり。 日本のお菓子とお茶をいただく(2007.3.3)



ノボシビルスクのシベリア北海道センターのイリーナさんが我が家を訪問(2008.7)



今回はノボシビルスク市に単身で6年半ほど在住した新田祐子さんからロシアでの貴重な体験を寄稿して戴きました。本センターでもシベリアの民族を研究しておりますので参考になることがあるかと存じます。今後のご活躍を期待しております。 (工藤 純一)

《 **うしとう**》(東北アジア学術交流懇話会ニューズレター)第38号 2008年12月15日発行 発行 東北アジア学術交流懇話会

〒 980-8576 宮城県仙台市青葉区川内 41 番地 東北大学東北アジア研究センター気付 PHONE 022-795-7580 FAX 022-795-6010 http://www.cneas.tohoku.ac.jp/gon2/ E-mail: gon@cneas.tohoku.ac.jp